



TITLE:

<批評・紹介> 編輯者申す

AUTHOR(S):

---

CITATION:

<批評・紹介> 編輯者申す. 東洋史研究 1937, 2(3): 280-280

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138723>

RIGHT:

編輯者申す。以上和田清氏の「支那」より石田幹之助氏の「支那文化と西方文化との交流」に至る十二の論著はすべて岩波の東洋思潮講座所収のものである。この講座は昭和九年六月に第一回の配本をなし昨年十月に最終十八回の配本を了したものでその間二ヶ年半の歳月を閲してをり、茲に取上げた十二の論著もすべてが新刊とは言得ない。初め刊行の都度然るべきものを紹介批評してはいふ議もあつたのであるが完了後一括して紹介した方が適當ではないかといふ説も出てその方に傾いて行つたのである。この度完了の機會にその百に垂んとする項目中より十二個を選んで紹介批評することにした。編輯者としてはせめて和田氏の「支那」の後に加藤繁氏の「支那の社會」と松井等氏の「支那民族」を、「塞外民族」の後に原田淑人氏の「滿蒙の文化」と石濱純太郎氏の「滿蒙言語の系統」を、支那の諸思想の中に宗教關係の項目と武内義雄、青木正兒兩氏執筆の諸論著と牧野巽氏の「支那に於ける家族制度」を、そして最後に松本信廣氏の印度支那の民族、言語、文化なる三部作を加へたかつたのである。また然るべき紹介者を選びもしてゐたのである。しかし紹介者の都合や紙數の關係などの諸事情でそれさへも果すことができなかった。更に他日の機會に何等かの

方法でこの希望を遂げたいと思ふ。一體この講座は羽田池内、武内、津田の四大家監修の下に我が東洋學者七十數名が動員されて成つたもので、その執筆者たるや殆んどすべてが世に定評のある既成の專家であるために我國東洋學の諸成果は略々茲に集められてゐると言つても差障りなからう。この講座を通じて既往の我が東洋學界の業績を回顧しうると共に之を發足點として將來への展開が期せられる譯である。併し何分各項目に與へられた頁數が百頁前後であるためにいづれもレジュメ然としてゐる。また紹介の方も頁數を制限したために物足らない感じがする。この二重の支障を取て押切らうとしたこの試みは或は無謀であつたであらうが、それは編輯者の無能に歸せられねばならぬ。併し昭和の我が東洋學界の記念標に敬意を表しようとした我々の微衷は認められるであらう。

最後に、この講座所収の論著が補訂を施され更に求め易い形、例へば岩波全書にでも再編輯されることは、この講座を基礎にした東洋學辭典の編纂されることと共にこの講座を一層完備する企てであらうと思ふ。拔目なく考へられてゐるだらうが一言附記する。